

岐阜県下の高等学校家庭科における 保育体験学習の実施状況に関する調査報告 (2)

—家庭科教諭の「保育体験学習」に関する意識調査—

A Survey of “Experience of child-care Program” of home economics
in High schools in Gifu Prefecture (2)

下野恵理子*・今村 光章**

SHIMONO Eriko and IMAMURA Mitsuyuki

※岐阜大学大学院教育学研究科（不破高等学校）

※※岐阜大学教育学部家政教育講座

第1節 調査の目的

前著「岐阜県下の高等学校家庭科における保育体験学習の実施状況に関する調査報告」¹⁾では、家庭科の主任教諭を対象に、各高等学校の保育体験学習の実施状況を調査した。その結果、県下での保育体験学習の実施状況が明らかになった。

しかしながら、この調査では、家庭科の主任教諭を対象を絞っていたため、一般の家庭科教諭が保育体験学習の意義をどのように受け止めているのかについては明らかではなかった。

そこで、本稿では、岐阜県下の高等学校の家庭科教諭が、保育体験学習をどのように受け止めているのかを検討し、保育体験学習を実施するにあたっての課題を明らかにしたい。

また、前著を第1報(1)と位置付け、本稿において第2報(2)として家庭科教諭の意識調査、そして本論文に続く、第3報(3)では、家庭科教諭以外の教諭の意識調査をすることで、岐阜県下の保育体験学習の総合的な調査報告を行いたい。

第2節 岐阜県高等学校の家庭科教諭へのアンケート調査方法と調査内容

第1項 実施時期・調査方法

2011年7月初旬に調査用紙を郵送し、7月末に返信用封筒にて回収した。ただし、手渡し

可能であった西濃地区の4校のみ手渡しで配布し、回収した。

第2項 調査対象者

対象者は、岐阜県の公立高等学校の家庭科教諭241名、および、岐阜県の私立高等学校の家庭科教諭68名、合計309名である。

調査にあたっては、岐阜県の教育委員会の『学事録』から家庭科の教諭（非常勤講師・育児休業中の教諭も含む）を把握しすべてを調査対象とした。そのため、育児休業中の教諭については、調査用紙が手に渡っていない場合もある。

第3項 回収率

309名中172名から回答を得た。回収率は、55.7%であった。公立では、241人中163人で、回収率は67.6%である。私立は68人中9人であった。私立高校の回収率が低い理由の一つに専任の教諭が不在であることが挙げられるが、理由は不明である。

第4項 質問項目の設定

伊藤葉子の先行研究²⁾を参考にし、質問項目と選択肢を作成した。紙数の都合で、アンケート用紙の掲載は控えざるを得ないが、項目はおおよそ以下の通りである。まず、属性に関する質問（2010年度に関して）として、①所属校名、②年齢、③性別、④高校教諭としての勤務年数、⑤勤務校での勤務年数、および、保育体験学習

について(2010年度に関して)は、問1：家庭科授業における保育体験学習の引率の回数，問2：実施形態(科目名・単位数・実習先・実習回数・実習時間・対象生徒人数・対象クラス数・時間割変更の有無・引率教諭人数)，問3：実習内容について(事前指導・事後指導)，問4：保育体験学習を実施しなかった状況，問5：保育体験学習を実施しなかった理由，問6：保育体験学習に関して感じている問題点，問7：生徒全員で保育体験学習を実施することの意義(自由記述方式)である。

第3節 調査結果

第1項 属性

①所属高等学校名を回答していただき、把握はしたが、ここでの掲載は控えたい。

②年齢

選択肢	割合(%)	人数
22～29歳	13	23
30～39歳	24	41
40～49歳	33	57
50～60歳	28	47
60歳以上	1	2
未記入	1	1
合計	100	171

③性別

選択肢	割合(%)	人数
女性	99	170
男性	1	1
合計	100	171

④高等学校教諭としての勤務年数

選択肢	割合(%)	人数
1～5年	14	23
5～9年	5	9
10～19年	40	69
20～29年	26	44
30年以上	13	23
未記入	2	3
合計	100	171

⑤昨年度の勤務校での勤務年数

選択肢	割合(%)	人数
1～3年	37	63
4～6年	29	50
7～9年	17	29
10～12年	4	6
13年以上	10	18
未記入	3	5
合計	100	171

第2項 保育体験学習について

問1. 家庭科の授業における保育体験学習の引率回数

選択肢	割合(%)	人数
0回	64	101
1回	6	10
2回	13	20
3回	5	6
4回以上	13	20
合計	100	157

問2-1 引率した場合の担当科目名

選択肢	割合(%)	件数
家庭基礎	10	7
家庭総合	11	8
発達と保育	36	26
児童文化	21	15
課題研究	8	6
その他	14	10
合計	100	72

※その他は、総合実習・社会福祉・幼児と表現・子ども福祉フィールドである。

問2-4 保育体験学習の実習時間

選択肢	割合(%)	数
1時間	13	9
2時間	40	29
3時間	15	11
約1日	14	10
その他	18	13
合計	100	72

※その他は、4時間(1)、半日間(3)、2日間(1)、3日間(1)、1時間と1日、2時間と1日である。

問2-1 保育体験学習を担当した科目の単位数

選択肢	割合(%)	件数
2単位	46	33
3単位	28	20
4単位	21	15
その他	5	4
合計	100	72

問2-5 保育体験学習の生徒の人数

選択肢	割合(%)	件数
10名未満	10	7
10~19名	33	24
20~29名	14	10
30名以上	43	31
合計	100	72

問2-2 保育体験学習を担当した科目の実習先

選択肢	割合(%)	件数
保育所	58	42
幼稚園	25	18
両方	6	4
その他	11	8
合計	100	72

※その他は、子ども館、乳幼児教室、幼稚園である。

問2-6 担当した保育体験学習のクラス数

選択肢	割合(%)	数
1クラス	50	36
2クラス	30	22
3クラス	3	2
4クラス~	17	12
合計	100	72

問2-3 保育体験学習を担当した実習回数

選択肢	割合(%)	数
1回	42	30
2回	32	23
3回	7	5
4回以上	19	14
合計	100	72

問2-7 保育体験学習の時間割変更の有無

選択肢	割合(%)	数
必要あり	39	28
通常時間	33	24
他教科時間	4	3
その他	24	17
合計	100	72

問2-8 担当した保育体験学習の引率者人数

選択肢	割合 (%)	数
家庭科1人	49	35
家庭科2人	42	30
家庭科3人～	5	4
他教科	1	1
その他	3	2
合計	100	72

問3-1 事前指導の内容 (複数回答)

選択肢	数
劇などの披露を準備する	23
体験学習の個々の目的を設定する	34
子どもと楽しく遊ぶ準備をする	37
保育施設の概要を理解する	38
玩具を製作する	44
安全面での注意事項を理解する	49
子どもとの適切な接し方を学ぶ	51
適切な身なりを整える	54

問3-2 保育体験学習の具体的内容 (複数回答)

選択肢	件数
手作りおもちゃで交流	29
人形劇・ペープサート	6
パネルシアター	6
絵本・紙芝居読み聞かせ	5
劇・手話歌	5
散歩	3
プール遊び	3
生活支援	3
手遊び	3
プレゼント製作	2
園の活動に参加	2
一緒に作品製作	2
外遊び	2
ゲーム	2
エプロンシアター・ポンチョシアター	2
招待して交流	1
歌を披露する	1

問3-4 事後指導の内容 (複数回答可)

選択肢	数
交流を継続する	13
話し合い・報告会をする	19
お礼の気持ちを伝える	30
感じたことをレポートにまとめる	53

問4-1 保育体験学習を実施しなかった状況について

選択肢	割合 (%)	件数
校内では実施しているが担当者ではない	59	64
校内で実施していない	41	45
合計	100	109

問5. 保育体験学習を実施していない理由(複数回答可)

選択肢	割合 (%)	件数
時間が取れない	15	25
クラス数が多すぎる	13	20
1クラスの人数が多すぎる	11	19
近くに施設がない	7	12
生徒が問題をおこすか心配	3	5
教諭側が忙しい	2	4
必要性を感じていない	1	2
学校の許可がとれない	1	1
相手側の許可がとれない	1	1
その他	4	7

問6. 保育体験学習の問題点(複数回答可)

選択肢	割合 (%)	人数
割り当てる時間が少ない	36	62
手続き(時間割変更)に苦労する	33	57
評価が難しい	18	31
うまく遊べない生徒への指導が難しい	15	26
生徒が幼児について知識が少ない	12	22
おもちゃを作る教材の指導が難しい	12	21
相手側と意思疎通を図るのが難しい	11	20
相手側の期待に応えるのが難しい	10	17
どのような年間指導計画がいいか分からない	5	9
生徒の幼児への関心が低い	4	7
事前指導がうまくいかない	4	6
生徒の興味・関心を高められない	4	6
生徒に明確な目標を持たせられない	3	5
男子と女子の学習意欲に差がある	3	5
事後指導がうまくいかない	2	4
どこに位置づけたらいいのか分からない	0	0

第4節 考察

問1の結果より、岐阜県の家庭科教諭の中で、昨年度(2010年度)保育体験学習の引率を経験しなかった教諭は64%を占め、経験した36%を上回っている。前著で明らかになったように、岐阜県では約半数の高校において保育体験学習を行っているが、家庭科の専門高校等では、科目ごとに担当者が固定され、一部の教諭のみが保育科目を担当することが多いため、家庭科教諭内での引率経験が半数よりも少なくなったと考えられる。

問2の結果より、保育体験学習を担当した科目は、「発達と保育」が36%と最も割合が高いが、「発達と保育」は専門科以外の高校でも、総合学科や単位制、工業科、普通科の高校等幅広い校種で履修されているため、割合が高くなっていると考えられる。

次いで、保育体験学習を担当した科目は2単位が最も割合が高く、33%を占めている。これは、現在履修されている科目の中で、2単位の科目が1番多いためと考えられる。

また、保育体験学習を実施した実習先は、保育所が58%と最も割合が高くなっている。1つ目の理由として、公立の保育所が高校に隣接している場合があり、実施しやすいことが考えられる。2つ目の理由として、保育所の方が幼稚園よりも数が多いためと考えられる。岐阜県庁のホームページのデータによれば、平成23年4月現在、岐阜県内の認可保育所は440施設、認可外保育所は77施設、公立幼稚園は82施設、私立幼稚園は106施設である³⁾。必然的に数の多い保育所の方が近くにある場合が多いため、実施される割合が高くなっていると考えられる。

保育体験学習の実習回数は、1回が最も多く42%、次いで2回が32%、4回以上が21%となっている。4回以上の科目の内訳を見ると、「家庭基礎」が2校、「家庭総合」が3校、「発達と保育」が3校、「児童文化」が2校、「課題研究」が4校となっている。必修科目で実施の場合は、クラス数が多く、異なるクラスで実施しているため、回数が多くなり、選択科目で実施の場合は、同一生徒で、内容を変えて数回にわたり実施していると考えられる。

保育体験学習の実習時間は、2時間が最も多く40%、次いで3時間が15%、約1日が14%を占めている。2時間で実習を行っている学校の内訳を見ると、専門科、普通科、工業科や農業科の学校など、学校種は様々であり、どの学校にとっても2時間が実施しやすい長さだと考えられる。

時間割変更の有無も併せて見てみると、「時間割変更の必要あり」の学校が14校、「通常時間」の学校が12校、「他教科時間」の1校、「その他」の学校が2校であった。時間割変更して実施する学校と、2時間続きの授業の中で実施している学校が、ほぼ同数くらいあることが分かった。

保育体験学習の生徒人数は、30名以上が最も多く43%、次いで10~19名が33%を占めている。クラス数は、1クラス最も多く50%、次いで2クラスが30%、4クラス以上が17%を占めている。30名以上かつ4クラス以上で実施している学校は11校あり、学校種の内訳を見ると、普通科が4校、商業科が3校、農業科が2校、工業科が2校であった。4クラス以上の大所帯で実施している学校は、家庭科の専門高校以外で実施されていることが分かった。

なお、保育体験学習の引率者は、「家庭科1人」が最も多く49%、次いで「家庭科2人」が42%を占めており、「他教科」はわずか1%しかなかった。以上の結果から、授業の担当者1~2人で引率することがほとんどで、他教科にお願いすることはほとんどないことが分かった。

問3の結果より、事前指導では、「適切な身なりを整える」が54名と最も多く、次いで「子どもとの適切な接し方を学ぶ」が51名、「安全面での注意事項を理解する」が49名となっている。これらは、保育体験学習を実施するにあたって、相手側に迷惑がかからないよう、生徒に対して最低限指導する必要がある項目であると考えられる。「玩具を製作する」は、44名と多いが、「劇などの披露を準備する」はその約半数の23名にとどまっている。これは、実習内容が手作りおもちゃでの交流が最も多いためと考える。

実習の内容に関しては、「手作りのおもちゃで交流する」が29名と最も多く、37.7%を占め

ており、様々な校種の学校で実施されている。次いで「人形劇・ペープサート」「パネルシアター」が6名と多く、これらを実施している学校は、専門科のある学校など普通科以外の学校が多い。また、事後指導で最も多いのは、「感じたことをレポートにまとめる」で53校あり、保育体験学習を実施した学校の中で、94.6%の学校が行っている。それに比べ「お礼の気持ちを伝える」は30校のみで、保育体験学習を実施した学校の中では53.6%の学校しか行っていない。また、「話し合い・報告会をする」は19校のみで、33.9%の学校、「交流を継続する」は13校のみで、23.2%の学校しか行っていないことが分かった。問4～問6は、第7項で千葉県と比較しながら総合的に考察する。

問7の結果より、生徒全員で保育体験学習を実施することの意義について、岐阜県高等学校の家庭科教諭の中で様々な意見があることが分かった。

まず、生徒全員で実施する意義としては、以下の4点が挙げられる。

- ①クラスの仲間の新しい一面に触れることができ、事後のまとめで、共通理解が図りやすく、知識・技術を共有できる機会になる。
- ②保育(子ども)に興味のない生徒も、必ず学ぶ機会とすることができ、興味関心を高めるきっかけとなる。苦手と思いつけていた生徒が、意外に関わることができ、自信をもつこともある。
- ③意識の高い者や低い者も一緒になって実習することで、お互いに刺激し合いながら、幼児との接し方や自らの適性について学ぶことができる。
- ④進路や興味関心の有無ではなく、上手く接することでもなく、同じ時間を体験することが大切である。

以上のことから、進路や興味関心の有無ではなく生徒全員で保育体験学習を実施することは、全員が乳幼児との接し方や自らの適性について学ぶことができ、クラスの仲間同士でお互い刺激し合いながら、保育に関する知識や技術を共有することができるが、意義として考えられる。

次に生徒全員で実施することの問題点としては、次の4点が挙げられる。

- ①普通科・総合学科・商業科等のクラスで、家庭基礎・家庭総合の授業の中で実施することは、人数的にも、時間的にも難しく、他教科にも迷惑がかかる。
- ②関心の低い生徒もいるので、無理に体験学習させることは、幼児らにとってもマイナスになり、迷惑をかける恐れがある。
- ③事前学習などに十分な時間をとれず、目的意識をしっかりと持たせることができずに実施しても効果が少ない。
- ④人数が多すぎて、受け入れる側に負担がかかり、すべての生徒が満足に体験できない。

以上のことから、生徒全員で保育体験学習を実施することの問題点は、大きく二つに分けられ、時間や人数等、物理的な面と、生徒の意識の低さ等、精神的な面に分けられる。物理的な面を解決することは難しいが、精神的な面で、「生徒に目的意識をしっかりと持たせ、前向きに実習に臨ませる」のは、教諭の力量にかかっており、事前学習のやり方次第で解決できると考える。生徒一人一人が、子どもに対するイメージが異なり、中にはマイナスのイメージを持っている人もいるが、まずは、積極的に触れ合うことを目標にして、イメージが少しずつプラスに変わっていけるように、見守ることも必要であると考えられる。

今回の調査で明らかになったのは、教諭は保育体験学習を、本当は実施したいのだが近くに適切な施設がなく校内で人形を用いて疑似体験を行っている学校があることである。他方では、すべての生徒が満足に体験できないためメリットよりデメリットの方が大きいのではないかと考え、実施していない学校もあることが明らかになった。さらに、外部に出る体験より授業内で簡単に実施可能な保育実習でも効果は高いと考えている学校もある。家庭科教諭の考え方次第で、生徒の保育体験学習を実施する機会が大きく左右されることがある。

次に、紙数の都合で表は割愛するが、引率者と属性(年齢や子どもの有無)との関連について触れておきたい。年齢別に引率の割合を見て

みると、「40～49歳」が45.6%と最も多く、次いで「50歳以上」が38.8%と多い。「40～49歳」は、家庭科教諭の総人数のうちの占める割合も最も高く、各学校において中心となって活躍している場合が多いため、保育体験学習にも積極的に取り組んでいるのではないかと考える。

また、引率者の子どもの有無を年齢別に比較すると、「50歳以上」が89.5%と最も割合が高く、次いで「40～49歳」が88.5%と割合が高い。また「20～29歳」で子どもがいる引率者の割合は0%である。これらより、子育てが一段落した40歳以上の教諭が、保育体験学習を引率している場合が多いことが分かった。

第5節 総合的考察—千葉県との比較から

最後に、岐阜県と千葉県の保育体験学習に関する意識の比較をみてみよう。伊藤葉子の先行研究¹⁾を参考にし、千葉県と岐阜県の高等学校の家庭科教諭における保育体験学習の意識を比較してみる。調査対象は、岐阜県は、アンケートの回答が得られた家庭科教諭172名で、千葉県は、同じく回答が得られた139名とする。なお、比較するアンケートの項目は同じだが、調査の時期が5年あるため、両者を単純に比較することは難しいが、一定の課題も見えてくるように考えられる。

岐阜県は、どの選択肢も千葉県と比べて全体的に割合が低い傾向にある。これは岐阜県が、保育体験学習を実施していない割合が千葉県と比べて低いためだと考えられる。

「時間がとれない」の割合が、両県とも1番高くなっている。その理由として、現行の指導要領では、必修家庭科3科目のうち1科目の単位数が2単位まで削減されたため、普通科高校などで2単位である「家庭基礎」を履修している学校は、時間数が足りないことが考えられる。

また、「クラス数が多すぎる」「1クラスの人数が多すぎる」の割合が両県とも多いのは、普通科高校などで必修家庭科の授業で実施しようと思うと、1学年のクラス数や、1クラスの人数が多く、実施するのが物理的に困難なためだと考えられる。

「教諭側が忙しい」の割合が高いのは、専門

校でない場合、家庭科教諭1人しかいない場合が多く、教科以外の雑務を1人で担当する場合が多いため、保育体験学習に伴う雑務をする余裕がないためと考えられる。千葉県は割合が4番目に高いが、岐阜県は割合が極めて低い。これは、県民性¹⁾(岐阜県：保守的・素直・おとなしい、千葉県：細かなことにこだわらない・投げやり)が関係しているのではないかと考える。

さて、中身もみていこう。

「男子と女子の学習意欲に差がある」が千葉県は20.1%と高いが、岐阜県は2.9%と低い。これは、岐阜県と千葉県では調査実施の時期に約5年の差があり、岐阜県は男女共修になってさらに年数が経ったため、意欲に差がなくなってきたと考えられる。

「幼児への関心が低い」が千葉県は12.9%あるのに対して、岐阜県は4%と低い。また「幼児についての知識が少ない」が千葉県は36%あるのに対して、岐阜県は12.8%と千葉県の1/3しかない。これは、新学習指導要領で中学校家庭科における幼児との触れ合いが必修になることに向けて、保育体験学習を実施している中学校が増えたために、幼児への関心があって、知識がある生徒が増えてきたと考えられる。

「相手側と意志の疎通を図るのが難しい」が千葉県は29.5%あるのに対して、岐阜県は11.6%しかない。これは、岐阜県は保育体験学習を数年間にわたって実施している学校が多く、関係ができていたためと考える。

「手続き(時間割変更)に苦勞する」が千葉県は51.1%あるのに対して、岐阜県は33.1%しかない。これは、専門校では、時間が連続で確保されていることが多く、時間割変更等で苦勞することが少ないためと考えられる。

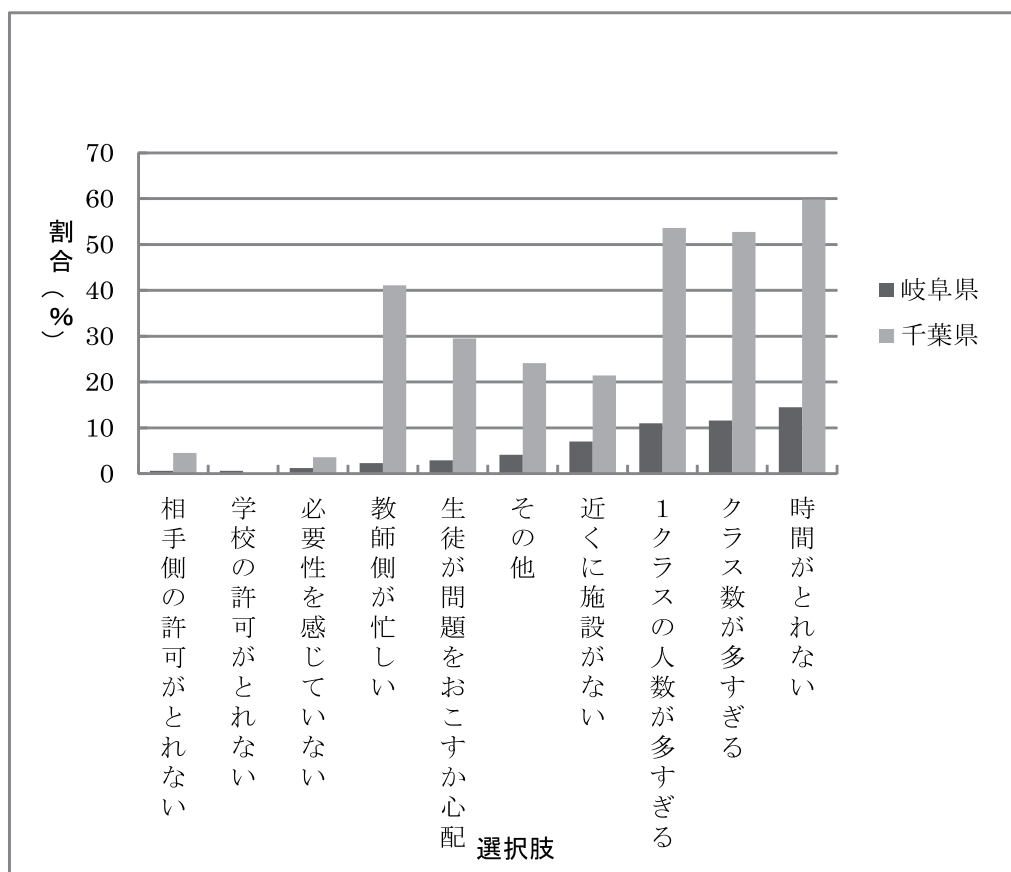
「おもちゃを作る教材の指導が難しい」が千葉県は7.9%と割合が低い、岐阜県は12.2%と千葉県よりも割合が高い。これは問2(2)より2単位の科目での実施が46%あり、時間の確保が難しいためと考える。問2(1)より「家庭基礎」を履修している場合が10%あるが、特に時間の確保が難しいと考えられる。

また、「評価が難しい」が千葉県では15.1%

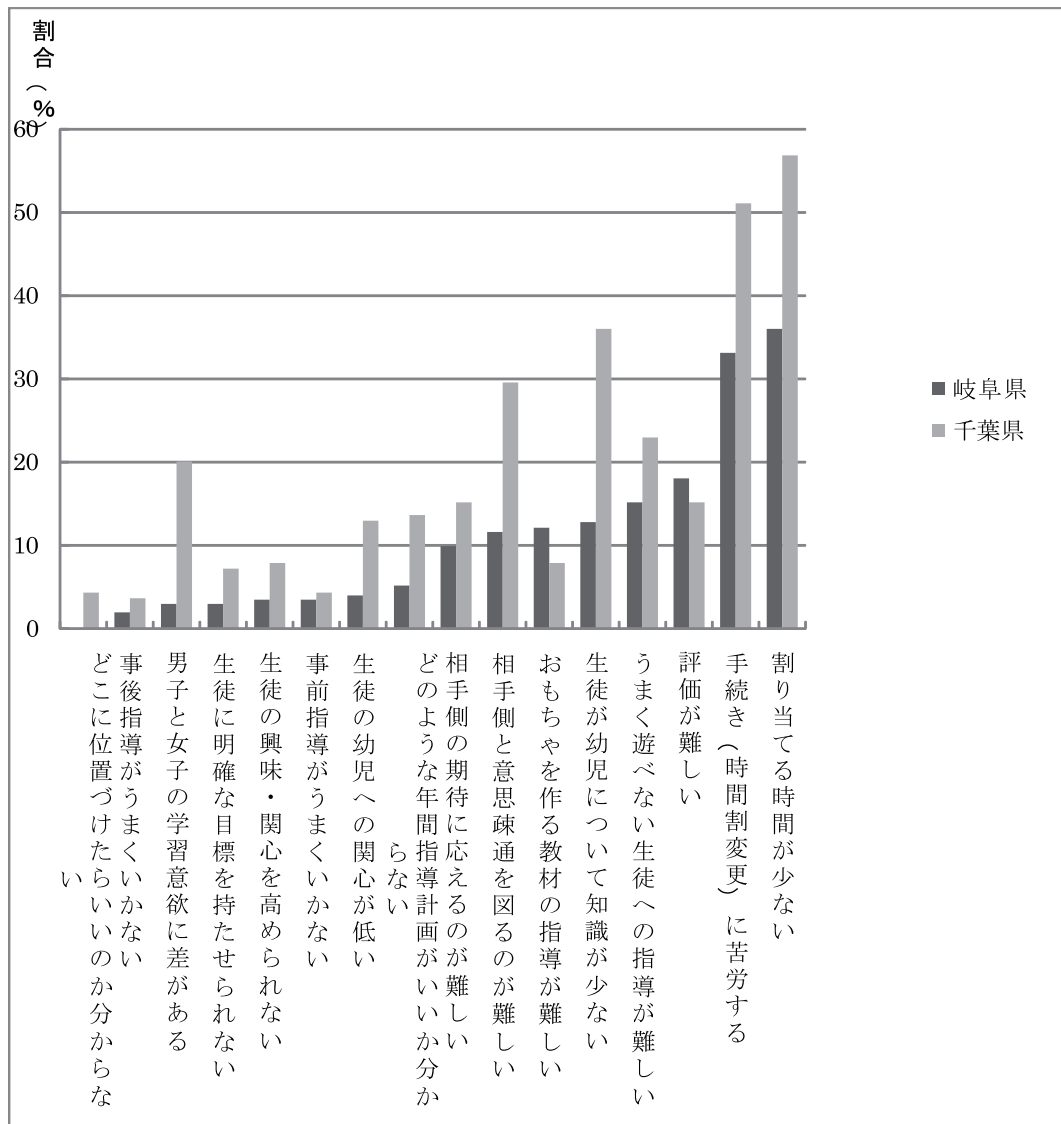
であるのに対し、岐阜県は18%と千葉県より割合が高い。これは、問2(6)より生徒人数が30名以上の割合が43%もあり、1人の教諭で生徒全員を評価することが難しいためと考えられる。

以上のように総合的な考察を試みたが、現段階では、保育体験学習はまだまだ障害があるように考えられる。その障害を乗り越えていく方策を考えたい。

グラフ1. 実施していない理由は何ですか。
(複数回答可) (岐阜：2010年, 千葉：2004・2005年)



グラフ2. 保育体験学習に感じている問題点は何ですか。
(複数回答可) (岐阜：2010年, 千葉：2004・2005年)



参考文献

- 1) 下野恵理子・今村光章, 2012, 岐阜県下の高等学校における保育教育, 岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究, 第14巻 (2011), pp.23-32.
- 2) 伊藤葉子, 2007, 「中・高校生の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討」, 日本家政学会誌, Vol.58, No.6. pp.315-326.
- 3) 清流の国 岐阜県
[www.pref.gifu.lg.jp/kyoiku-bunka-sports/gakko-kyoiku/ichiran/gakkoichiran/]
(最終アクセス日, 2012年12月24日)
- 4) おもしろ県民性データブック
[diamond.jp/category/s-kenmin]